

# 家族システムと子どもの楽観度

谷夏紀 角谷千恵 森本真由美

## 目次

序論

目的

楽観度

家族システム

オルソン円環モデル

方法

予備調査

本調査

質問紙(CASQ)

質問紙(FACESKG4)

結果・考察

結果

考察

参考文献

## 序 論

### ☆ 目的

人生には二通りの生き方がある。物事を楽観的に捉えるオプティミストと、悲観的に捉えるペシミストである。それらはアメリカのペンシルバニア大学教授（心理学者）セリグマンによると、説明スタイルという説明習慣によって分けられる。説明スタイルは、世の中における自分の地位をどう捉えるかー自分に価値があるのかないか、存在意義を見いだせるかどうかにかかっており、オプティミストとペシミストを分ける特徴的な目安である。また説明習慣の基本的なものは子ども時代から思春期にかけて身につけ、個々の思考習慣を確立し、定着する。私たちは子ども時代に、特に中学生に着眼し、子どもに最も影響を与えると思われる家族との関係に焦点を当て、個々の説明スタイルに家族関係が影響するということを実証しようと試みた。

### ☆ 楽観度

説明スタイルには、永続性、普遍性、個人度の三つの重要な面がある。

#### ・ 永続性・Permanensy（以下Pmと明記）

不幸が起こった際、オプティミストの場合、その不幸は一時的なものだと捉えるが、

一方、ペシミストの場合、それをいつまでも続く永続的なものと捉える。

逆に、幸運が訪れたときは、それをオプティミストは永続的なものと捉え、ペシミ

ストは一時的なものとして捉える。

#### ・ 普遍性・Pervasive（以下Pvと明記）

不幸が起こった際、オプティミストの場合、その不幸は特定の状況においてのみと

捉えるが、一方、ペシミストの場合、それを状況に左右されない普遍的なものとして捉える。

逆に幸運が訪れたときは、それをオプティミストは普遍的なものとして捉え、ペシミス

トは特定のものと捉える。

#### ・ 個人度・Personarization（以下Psと明記）

不幸が起こった際、オプティミストの場合、その不幸は他人や状況のために起こっ

たと外向的に捉え、一方、ペシミストの場合、それを自分に責任があると内向的に

捉える。

逆に幸運が訪れたときは、それはオプティミストは内向的に捉え、ペシミストは外向的に捉える。

これら三つの概念は、セリグマンによって考え出されたものであり、楽観度を測る尺度として、A S Q (Attributional Style Questionnaire)がある。

## ☆ 家族システム

家族システムとは、家族を一つのシステムとして捉える考え方である。すなわち、家族とはそれぞれの成員という要素から成り立ち、しかもそれら成員それぞれとの間には相互関係が存在する。家族システムを考える上で、有力なものの一つにオルソンらの円環モデルがある。(1979～) オルソンによると、家族システムは「かじとり」と「きずな」という二つの特性からなっており、円環モデルとはそれら二つを軸として図示してまとめたものである。

### ・ かじとり

「家族が一つのシステムとして、状況的なあるいは成員の発達的な変化に応じて、自分たちのシステムの力関係や役割関係あるいは関係のルールをどの程度変化させ得るか」をかじとりと呼ぶ。健康なシステムでは自分のシステムを変化に応じて柔軟に変容させる力と、既存のシステムを維持させる力のバランスがとれているということになる。その度合いは(かじとりが鈍感な方から)融通なし、キッチリ、柔軟、てんやわんやの四つに分類される。

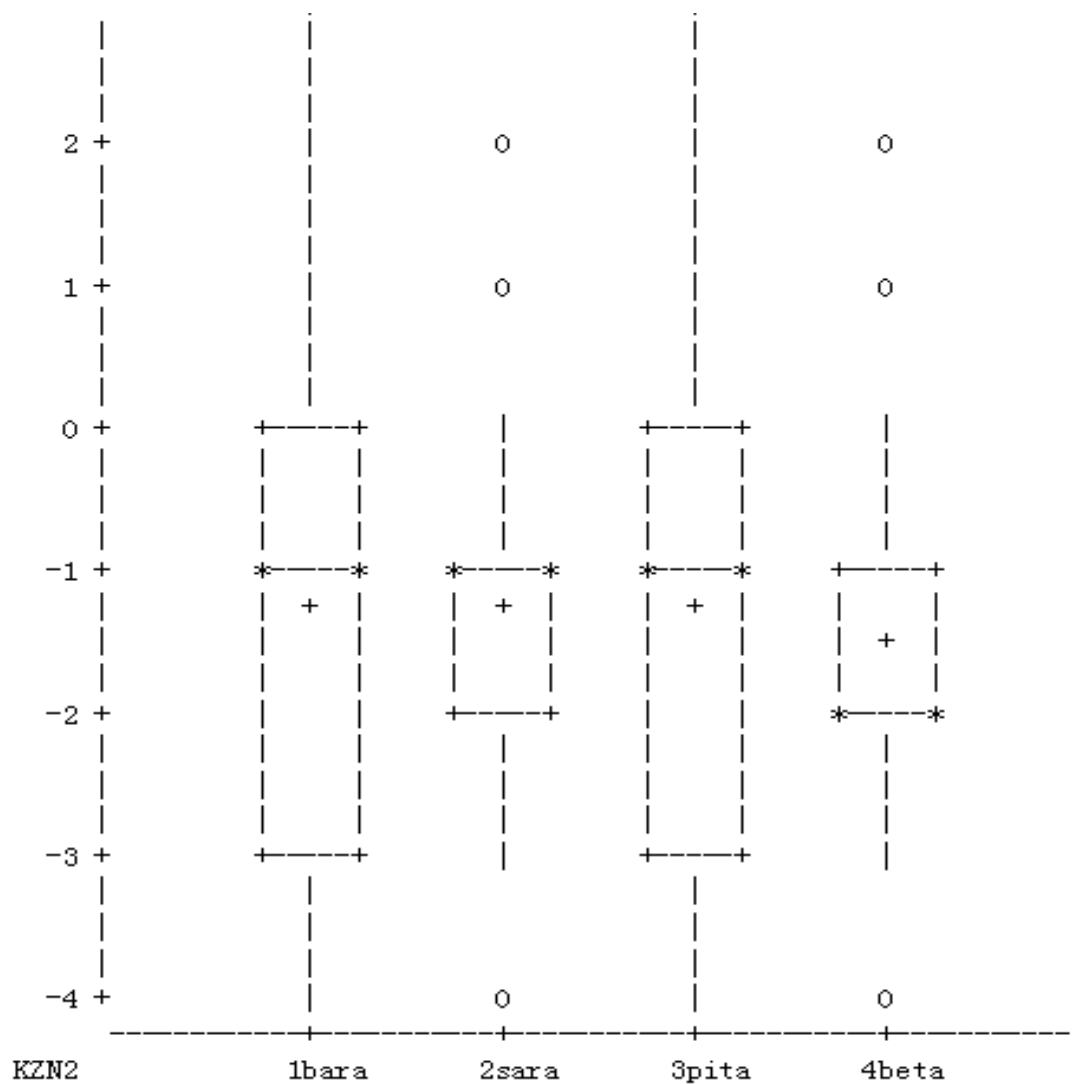
### ・ きずな

「成員間の心理的あるいは社会的な距離」であり、また「家族の成員が互いに対して持つ情緒的な結合」をきずなと呼ぶ。健康な家族システムでは、成員間の距離は中庸な段階にあり、バランスが保たれている。その度合いは(きずなが低い方から)バラバラ、サラリ、ピッタリ、ベッタリの四つに分類される。

下図でかじとりときずなの軸が中庸な状態、すなわち中心部に位置する場合、このシステムは健康であると判断される。逆に両者が極端、すなわち周辺部に位置する場合、このシステムは不安定な状態にあると判断される。

この度合いを測る尺度として、FACESKG4(Family Adaptability and Cohesion

Evaluation Scale at Kwansei Gakuin、立木・オルソン式家族システム評価尺度第四版)を用いた。





# 方 法

- 予備調査

＊以下の調査はすべて、立木ゼミの1998年度卒論グループと協同で行った。

私たちはセリグマンのASQを基に、日本の子どもたちを対象とするアンケートCASQ(Children's Attributional Style Questionnaire)を作成するために、まず予備調査を行った。

- ・被験者 兵庫県、大阪府、福井県下の小学生5年生から高校3年生までの1561名。
- 材料 以下のようなセリグマン(1991)の子どもの特性診断テストCASQに準じる形式の計96項目を、下位概念と項目のバランスを等しくして24項目ずつに分割した4種類の質問紙(K、C、U、M)を用いた。

セリグマン(1991)は、CASQの対象を8才から13才までとしているが、私たちは小学高学年児から高校生までを対象とし、日本人によりふさわしいものに改変した。

セリグマンのCASQは48の出来事について、それらが起こったと想定させた上で、その原因をどのように帰属するかを2択で選ばせるものである。本調査では質問と回答の形式はセリグマンのCASQに準じることとした。項目が複雑になると、正確な回答が得られないと考え、項目数を減らし文章も簡単なものにした。最終的に24項目の質問紙を作成するために、ここではパイロットテストとして96項目について相当数のサンプルを収集・分析することとした。またセリグマンのCASQは、良い出来事と(good event以下Gと明記)と悪い出来事(bad event以下Bと明記)の各々について3つの因子、すなわちPS・PV・PMを含み計6因子で構成されている。本調査でもこの概念に基づいて6因子をもうけた。まず、出来事が起こる場面設定においては、学校場面と日常生活場面とが半分ずつの割合になるようにした。さらに、出来事の重要さや深刻さの度合いによって説明スタイルが変わることに考慮し、出来事を重いものと、比較的軽いものとに分けた。従って、1つの因子の下に4つの下位概念を含む、 $6 \times 4 = 24$ の概念が作られた。

上記のものは立木ゼミ生5名が各自で、24の概念に合致する質問項目を2個ずつ、1人48項目を考案した。計240項目について、質問が重複しないこと、想定しやすい場面設定であることなどに配慮して96項目を選出した。これらの質問項目を、24の概念に対応した24項目ずつの質問紙K、C、U、Mに分割した。項目は概念に関わりなくランダムに配置された。

分析を始める前にデータの信頼度に悪影響を及ぼすようなサンプルをあらかじめ削除した。削除の対象は全項目にわたる同じ選択肢の回答、あるいは規則性のある回答が見られたものとした。分析としてまず、4つの質問紙KCUMについてそれぞれ質問項目と下位概念との相関を出し、そこから相関の低かった項目を省いた。さらに項目に対して主成分分析を行ったところ質問紙Kにおいて解が3因子に限定された。これら3因子は各々Pm、Pv、Ps次元と解釈された。そのため質問紙Kを中心に相関、因子分析などを考慮した上でより信頼度の高い項目を選出し、最終的に24項目の質問紙を作成した。

☆本調査

- ・被験者 大阪2校の中学生334名（うち有効回答数327名）

学年	男	女	不明	計
1	50	45	2	97
2	69	68	4	141
3	54	40	1	95
不明	0	0	1	1
計	173	153	8	334

- ・材料 予備調査で作成したCASQとFACESKG4を用いた。

☆CASQ 質問紙

( ) 年 ( 男 / 女 )

もしこんなことが起きたら、あなたはア・イのどちらのことを考えますか。

近いと思う方に○をつけて下さい。どちらを選んでもまちがいということはありません。

1. 友達とトランプをして勝った。

ア. 自分が強いからだ。

イ. 友達が下手だからだ。

2. 発表会で指揮者をして成功した。

ア. 自分に実力があったからだ。

イ. 他のみんなの協力のおかげだ。

3. 好きな野球チームが優勝する。

ア. あのチームは強いからだ。

イ. 相手チームの調子が悪かったからだ。

4. 新しいクラスでみんなと仲良くなれた。

ア. 自分は人に好かれやすい。



イ.今度のクラスメイトは良い人ばかりだ。

5.担任の先生が最近優しくしてくれる。

ア.先生はきげんのよいときは優しい。

イ.先生は優しい人だ。

6.大切にしていた動物に子どもが生まれた。

ア.自分が上手に世話をしたからだ。

イ.大きくなったから当然のことだ。

7.学校で仲はずれにされる。

ア.仲間はずれにするみんなが悪い。

イ.自分が悪い子だから嫌われたんだ。

8.友達から急に口をきいてもらえなくなる。

ア.自分が何か友達の気にさわることをしたからだ。

イ.自分のことが、きらいになったからだ。

9.難しいゲームで勝った。

ア.自分は近頃ゲームを上手にできる。

イ.自分は人よりゲームがうまい。

10.答えをまちがい、大恥をかく。

ア.自分の勉強不足が原因だ。

イ.あんな問題、誰もわかるはずがない。

11.最近、学校生活が楽しい。

ア.良いことが起きると学校は楽しい。

イ.学校は楽しいところだ。

12.学校の運動会で自分のクラスが優勝する。

ア.自分のクラスはすごいクラスだ。

イ.自分のクラスはスポーツがよくできる。

13.カッターで指を切ってしまう。

ア.自分はカッターを使うことに慣れていなかった。

イ.カッターが切れにくかったからだ。

14.友達のゲームを壊してしまう。

ア.自分が不注意だったからだ。

イ.そのゲームは壊れかけていた。

15.仲の良い友人が転校してしまう。

ア.転校はよくあることだ。

イ.仕方のない事情があるからだ。

16.がんばって、きれいだった食べ物を食べられるようになった。

ア.自分は好き嫌いをなおすことができる。

イ.自分は何でもやればできる。

17.修学旅行でケガをした。

ア.修学旅行でははめを外してしまう。

イ.自分はよくケガをする。

18.初対面の人と話して、とても楽しかった。

ア.自分はその人と気が合う。

イ.自分は誰とでも楽しく話せる。

19.計算ミスで答えをまちがえた。

ア.あの時はうっかりしていた。

イ.自分はおっちょこちょいだ。

20.まちがい電話をしてしまう。

ア.自分は電話番号を覚えるのが苦手だ。

イ.今回は押しまちがえたのだ。

21.階段でつまづいた。

ア.階段は危ない。

イ.あの階段はつまづきやすい。

22.大切な友人と大げんかをして、長い間仲直りができない。

ア.その友人とは性格が合わない。

イ.その友人は、いじっぱりだ。

23.授業で分からないところがある。

ア.私はいつも理解することが苦手だ。

イ.今日の授業はむずかしすぎる。

24.今日、学校でよいことがたくさん起こった。

ア.今日はたまたま偶然が重なった。

イ.学校はたいてい楽しいところだ。

ご協力ありがとうございました。

このアンケートの詳細は以下のようにになっている。

各項目に対する概念は、

P m    Q 3   Q 5   Q 9   Q 1 5   Q 1 9   Q 2 0   Q 2 3   Q 2 4

P v    Q 8   Q 1 1   Q 1 2   Q 1 6   Q 1 7   Q 1 8   Q 2 1   Q 2 2

P s    Q 1   Q 2   Q 4   Q 6   Q 7   Q 1 0   Q 1 3   Q 1 4

である。

☆FACESKG4 s質問紙

( )年 (男・女)

あなたのご家族のふだんの生活についておうかがいします。

以下の項目には「正解」不正解」、あるいは「望ましい答え」や「望ましくない答え」  
はありません。

それぞれに対して、

当てはまる場合は はい に○

当てはまらない場合は いいえ に○

を右側の解答欄にご記入ください。

1. おおそうじにはお父さんも手伝っている。 はい いいえ
2. 私の家では親はなにも決められない。 はい いいえ
3. 遊びに行くときには絶対ではないが、親に行き先を告げるようにしている。  
はい いいえ

4. 親が苦しんでいるのをみると、親以上に自分が苦しくなる。 はい いいえ
5. 親に自分の将来のことを相談しても、いうことが毎日違う。 はい いいえ
6. 自分が病気になっても、家族は誰も看病してくれない。 はい いいえ
7. 父と母は仲がいい。 はい いいえ
8. 家族の誰かの様子が普段と違ってても、誰も声をかけない。 はい いいえ
9. 私は毎日2～3時間の長電話をしている。 はい いいえ
10. 私はどんな悪いことをしても、親にしかられたことはない。 はい いいえ
11. ときどきお母さんがおやつを買っておいてくれる。 はい いいえ
12. 誰かの帰りが遅いときには、その人が帰るまでみんな起きて  
待っている。 はい いいえ
13. 進路を決めるときには親の意見も聞いたが、最終的には自分で  
決めた。 はい いいえ
14. 私がよくないことをしたら、親は私になぜよくないことなのかを  
説明する。 はい いいえ
15. 親と腕を組んで買い物に行くことがある。 はい いいえ
16. 家族の誕生日や年齢をはっきり知らない。 はい いいえ
17. 友達についての悩みを親に相談することがある。 はい いいえ
18. ちょっと失敗しただけでも、親にしかられる。 はい いいえ
19. 親は私に「あなたは黙って親のいうことを聞いていたらいい」  
とよく言う。 はい いいえ
20. 私の家では親子でよくお風呂にはいる。 はい いいえ
21. 家族の予定と友達の約束が重なっても、友達との約束を優先  
する。 はい いいえ
22. 父と父の友人と、母は母の友人と遊びに行くことがある。 はい いいえ
23. 親は絶対、なにがあっても私の意見を聞き入れない。 はい いいえ

24. 私の家では話し合いが行われず、親が決定したことだけが  
子供に伝えられる。 はい いいえ
25. 自分が悪いことをしたら、親に殴られることはないが、  
厳しくしかられる。 はい いいえ
26. 父母とよく食事に行く。 はい いいえ
27. 家族のそれぞれの友人については全く知らない。 はい いいえ
28. 親はよく私の体に触れてくる。 はい いいえ
29. お母さんがクラス会などで夕ご飯を作れないような時は、  
誰かひまな人が作る。 はい いいえ

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

このアンケートの詳細は以下のようになっている。

各項目の概念は、

きずな Q4 Q6 Q7 Q8 Q11 Q12 Q15 Q16 Q17

Q20 Q21 Q22 Q26 Q27 Q28

かじとり Q1 Q2 Q3 Q5 Q9 Q10 Q13 Q14 Q18

Q19 Q23 Q24 Q25 Q29

である。



## 結果と考察

### ☆ 結果

分析を始める前に予備調査と同様、データの信頼度に悪影響を及ぼすようなサンプルをあらかじめ削除した。削除の対象はCASQに関しては予備調査と同じであるが、FACESKG4については無回答項目5項目以上のサンプルも対象とした。

分析は、FACESKG4におけるきずな、かじとりと、CASQから導き出された楽観度との分布を把握するために箱ヒゲ図を用いた。箱ヒゲ図とはTukey(1977)によって考案され、数値要約に視覚表示を加えることによって、分布の主要特性を極めて容易に把握できるものである。下端・中央・上端の水平線は、それぞれ第一四分位数（二五パーセンタイル）、中央値・第三四分位数（七五パーセンタイル）を表し、中央のプラス（+）マークは、平均値を表す。第一四分位数と、第三四分位数間の距離を四分偏差と言うが、箱から一、五四分偏差以内で、最も中央値から離れた点までヒゲとよばれる数直線を引く。さらに離れた測定値については、箱から三四分位偏差までなら、一つ一つを（0）であらわす。



・ 箱ひげ図結果について

図1は、きずなのレベルによる楽観度の違いを表したものである。縦軸はPMの値を示している。横軸はきずなを示しており、1がバラバラ、2がサラリ、3がピッタリ、4がベツタリである。それぞれの平均値を見ると、バラバラ-1.91、サラリ-1.92、ピッタリ-1.65、ベツタリ-2.05となり、全体を見る限りではきずなの度合いによる楽観度の変化は認められるようである。以下図2～図4で詳しく見ることにする。

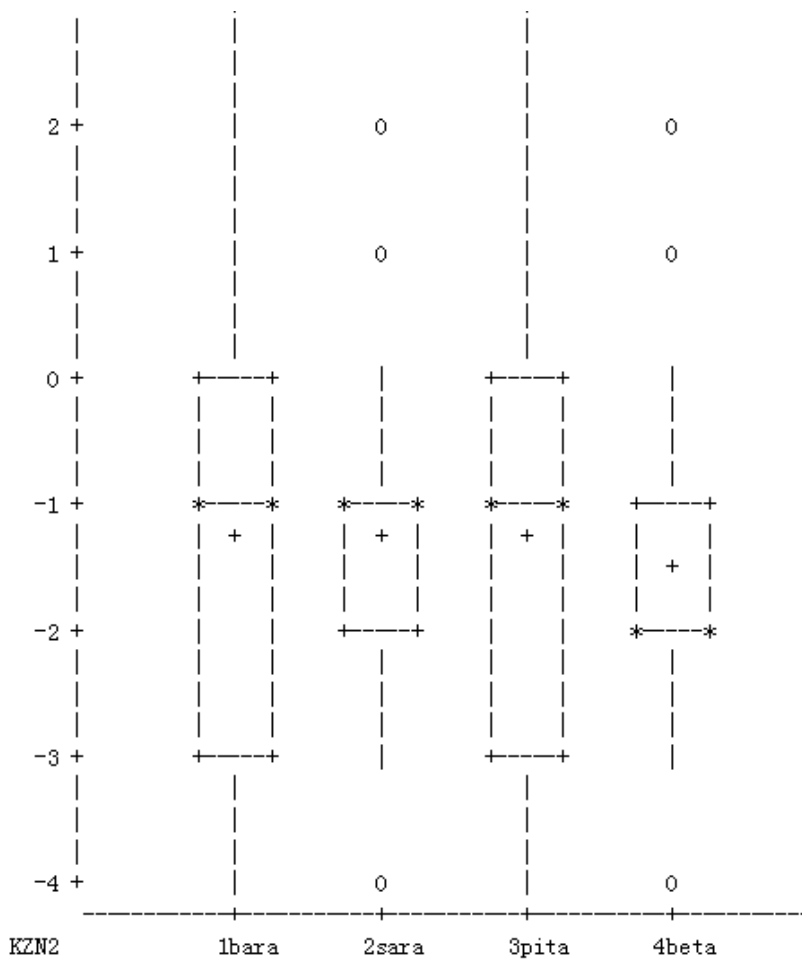


図2は、きずなのレベルによるPMの違いを表したものである。それぞれの平均値を見ると、バラバラ0.04、サラリ0.24、ピッタリ0.43、ベツタリ0.40となり、「ピッタリ」「ベツタリ」ケース、つまりきずなの度合いが高くなるにつれ、楽観度が高くなった。

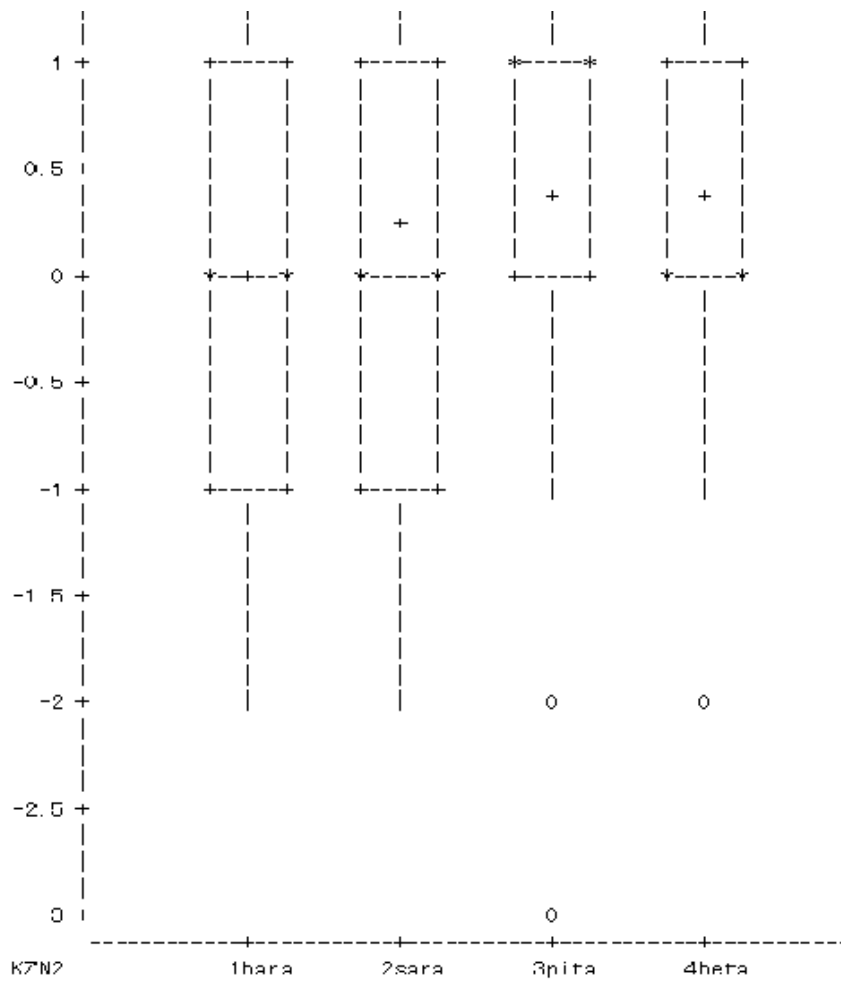


図3は、きずなのレベルによるPVの違いを表したものである。それぞれの平均値を見ると、バラバラ-0.64、サラリ-0.83、ピッタリ-0.84、ベッタリ-0.84となり、きずなによるPV傾向に有意差は見られなかった。

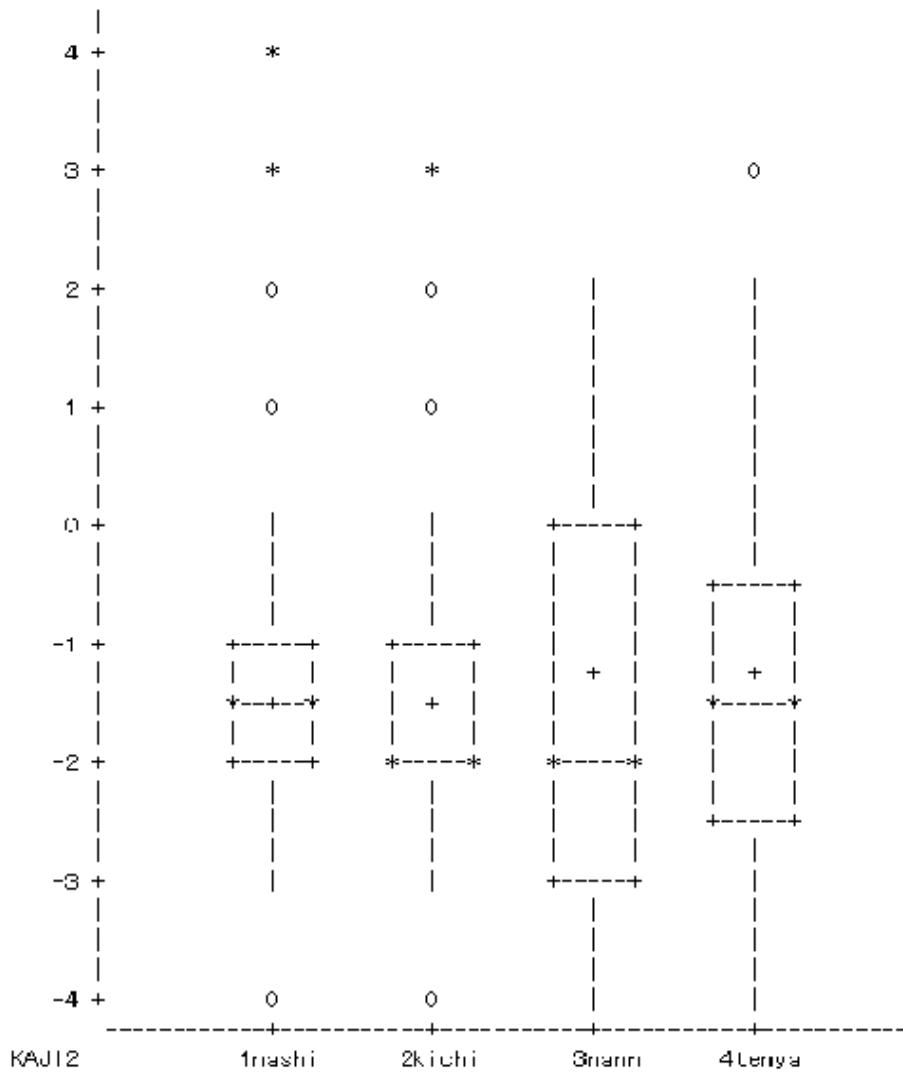


図4は、きずなのレベルによるPSの違いを表したものである。それぞれの平均値を見ると、バラバラ-1.25、サラリ-1.32、ピツタリ-1.30、ベツタリ-1.57となり、きずなによるPS傾向に有意差は見られなかった。

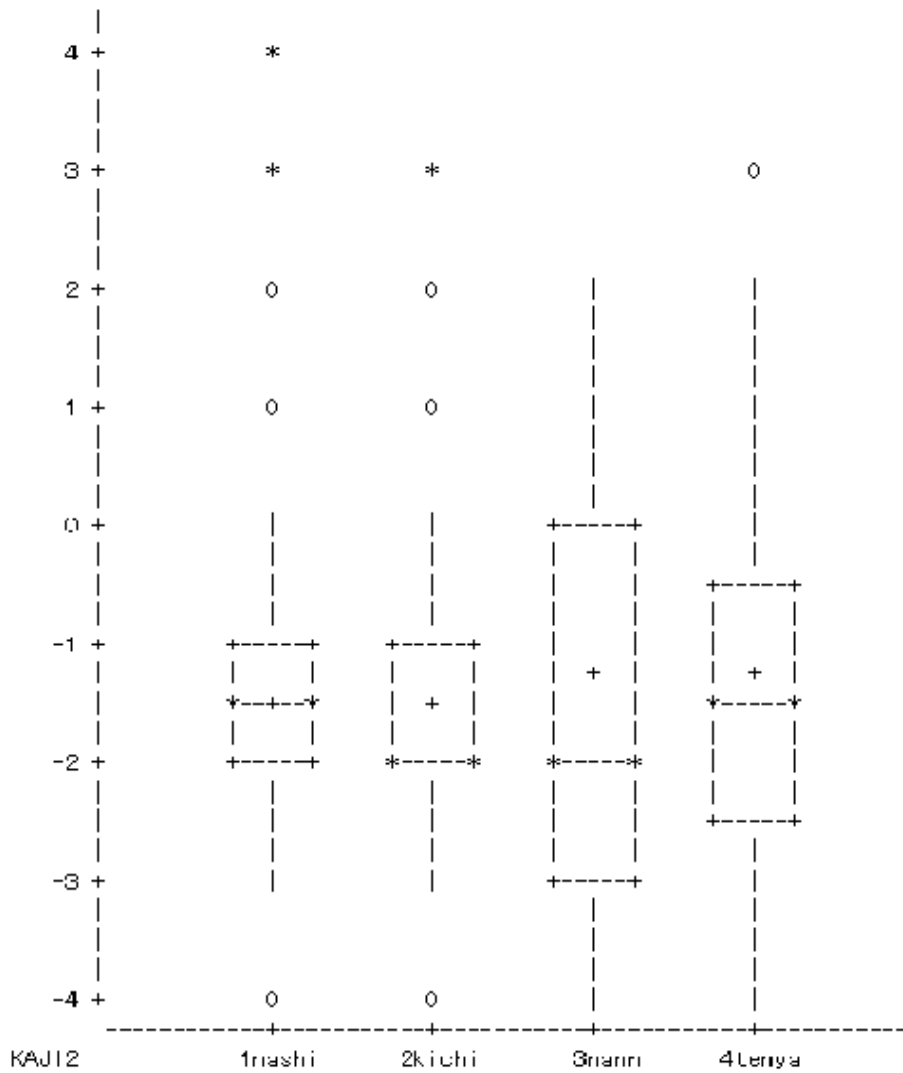


図5は、かじとりのレベルによる楽観度の違いを表したものである。縦軸はPMの値を示している。横軸は、かじとりを示しており、1が融通なし、2がキッチリ、3が柔軟、4がてんやわんやである。それぞれの平均値を見ると、融通なし-2.19、キッチリ-1.69、柔軟-1.95、てんやわんや-2.00となり、全体を見る限りではかじとりの度合いによる楽観度の変化は認められるようである。以下図6～図8で詳しく見ることにする。

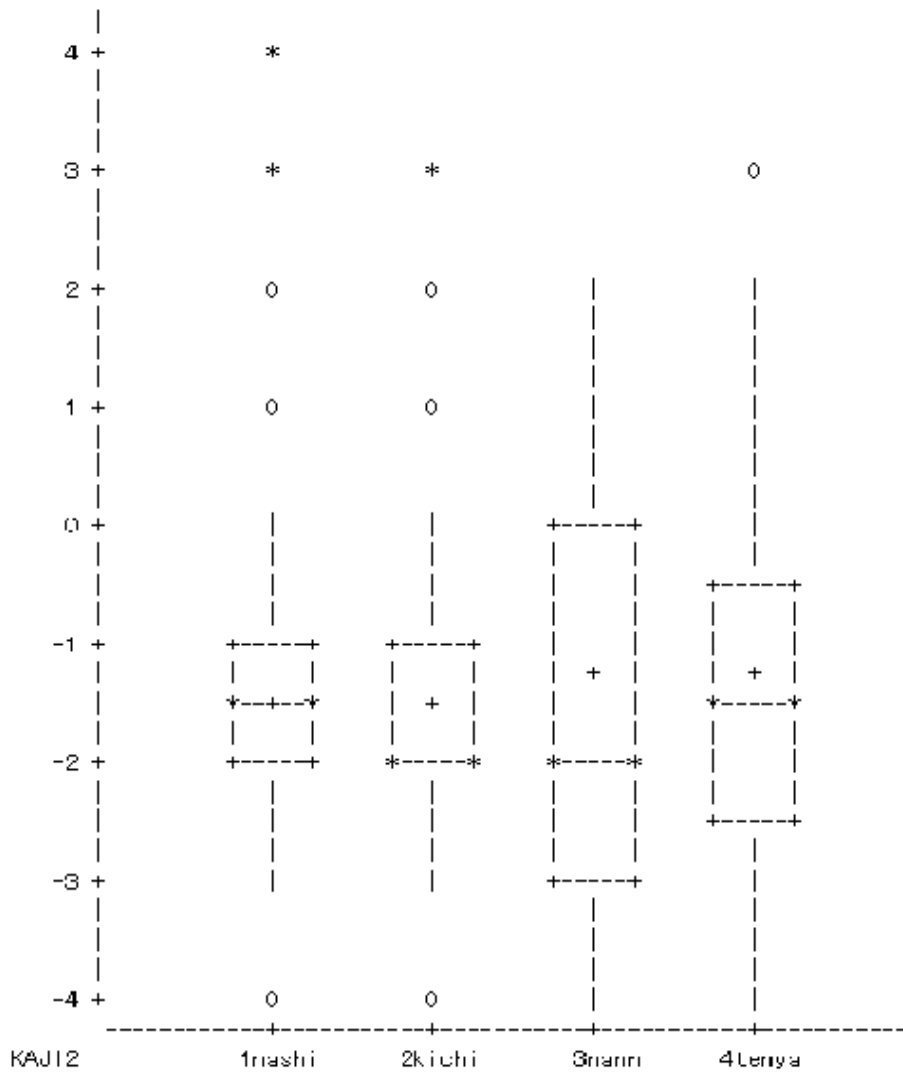


図6は、かじとりのレベルによるPMの違いを表したものである。それぞれの平均値を見ると、融通なし0.09、キッチリ0.40、柔軟0.46、てんやわんや0.20となり、「キッチリ」「柔軟」ケース、つまりかじとりがうまく機能している家族の子どもの楽観度が高くなった。

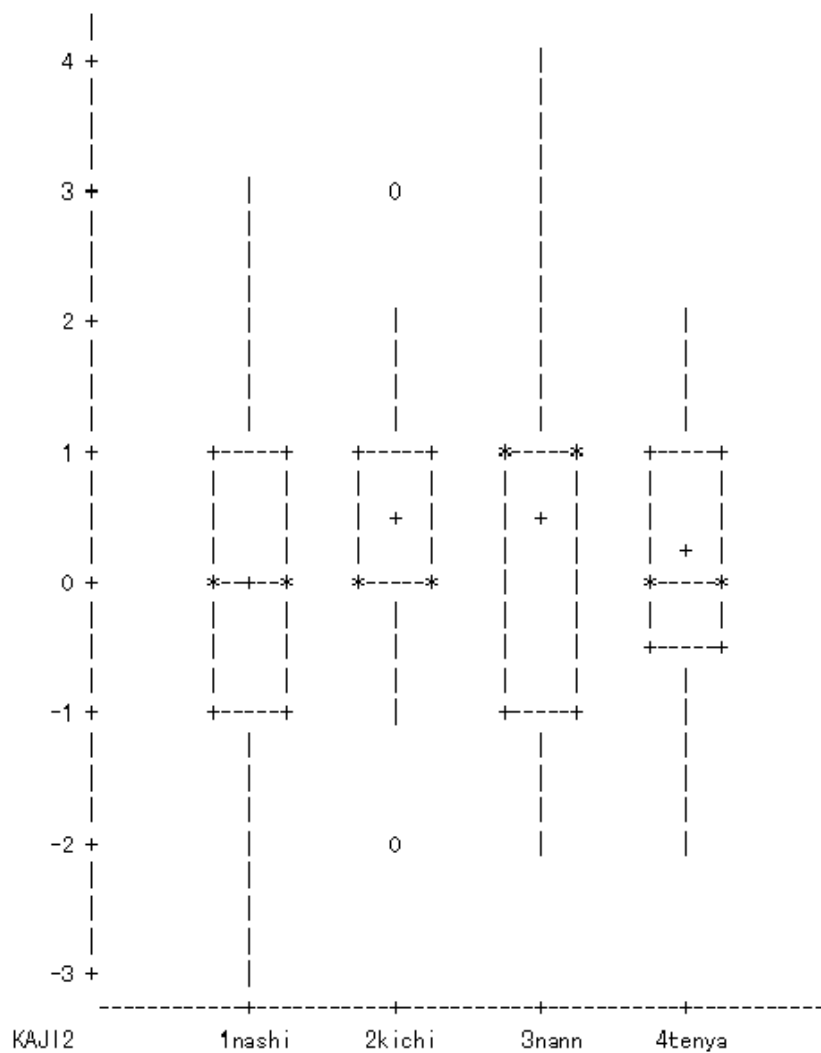


図7は、かじとりのレベルによるPVの違いを表したものである。それぞれの平均値を

見ると、融通なし-0.87、キッチリ-0.70、柔軟-1.08、てんやわんや-0.79となり、かじとりによるPV傾向に有意差は見られなかった。

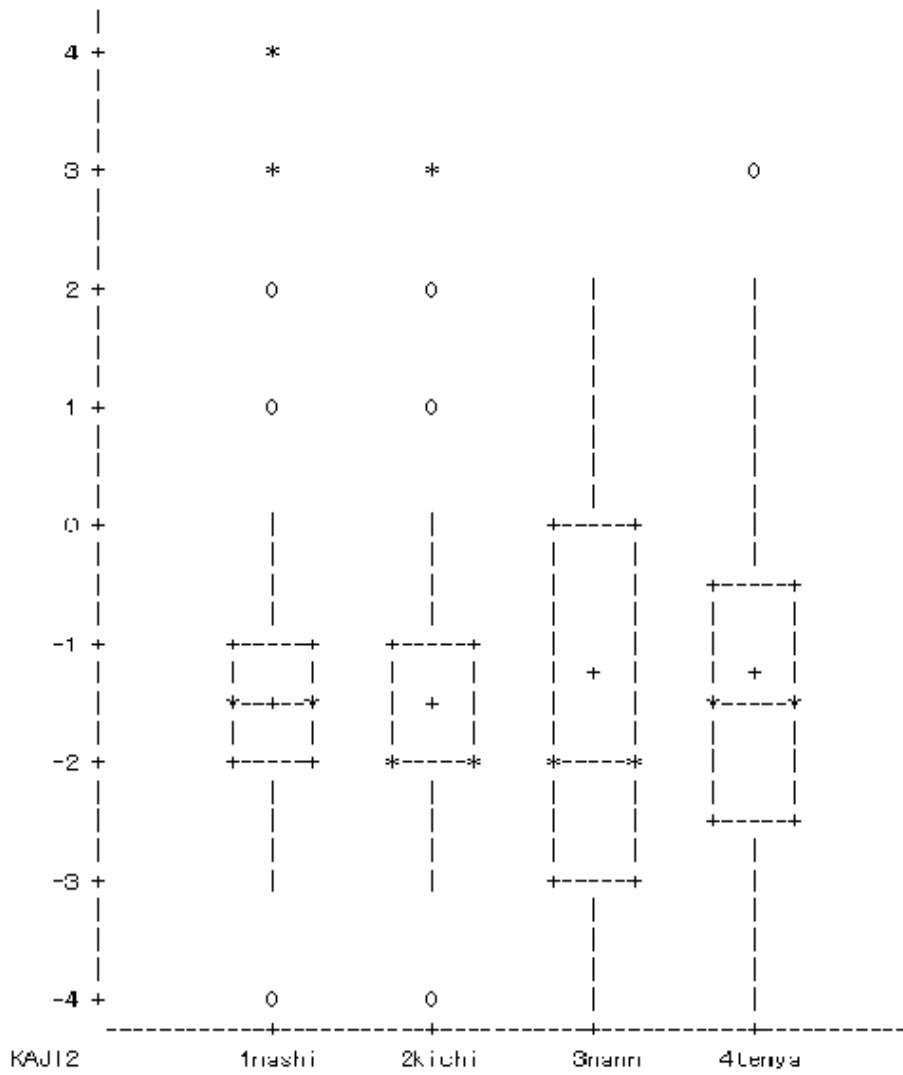
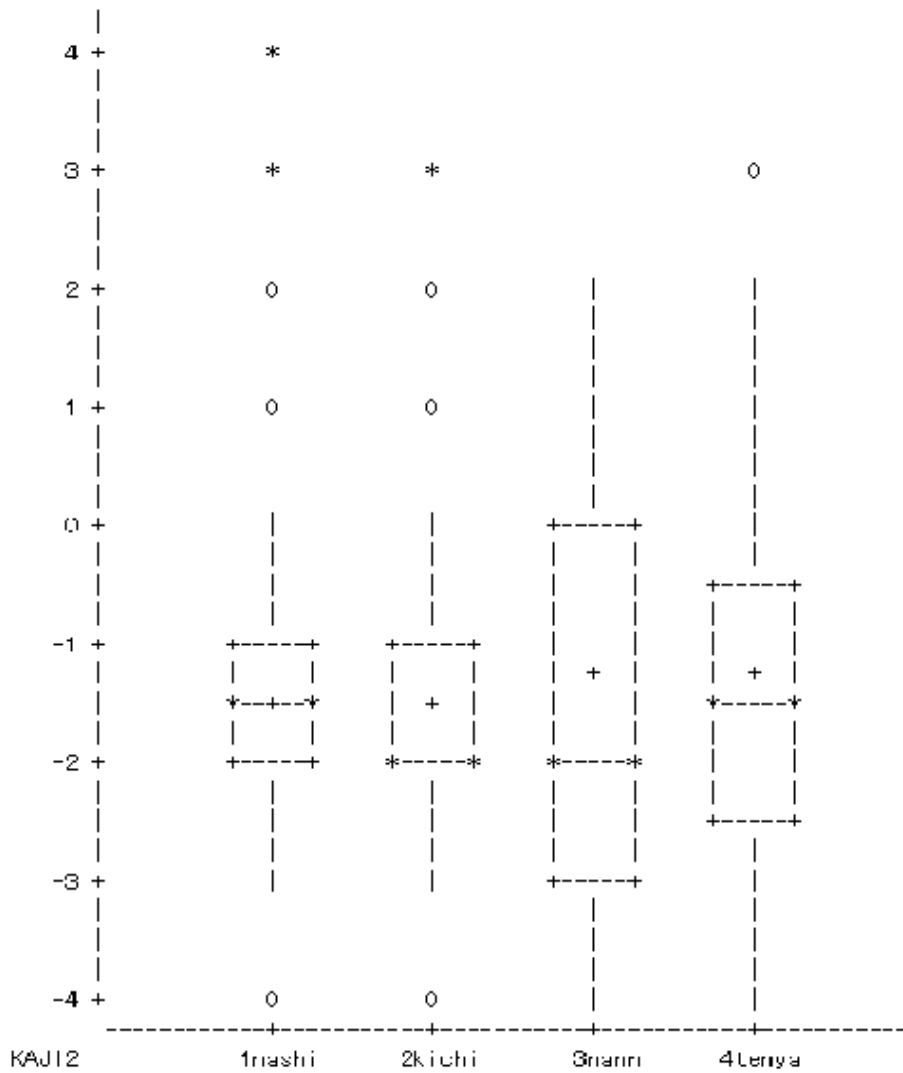


図8は、かじとりのレベルによるPSの違いを表したものである。それぞれの平均値を見ると、融通なし-1.38、キッチリ-1.41、柔軟-1.33、てんやわんや-1.33となり、かじとりがうまく機能している家族の子どもの楽観度が心持ち高くなった。



☆考察

まず、私たちが立てた仮説は、家族システムが健康な家族の子どもほど楽観度が高く、不安定な家族の子どもほど楽観度が低くなるというものだった。つまり、きずながサラリ、ピッタリで、かじとりがキッチリ、柔軟に位置する家族の子どもほどオプティミストであり、きずながバラバラ、ベツタリ、かじとりが融通なし、てんやわんやに位置する家族の子どもほどペシミストではないかというものである。

・ PM

PMで表される概念は永続性である。家族関係がしっかりしたもので、自分の存在を受け入れてくれる場があると感じている子どもは、幸運な出来事を素直に受け止めることができる。家族関係が不安定である場合、自分をいつも受け止めてくれる受け皿がな



いので、安心して物事を見ることができない。そのため、この幸運は一時的なものだと感じてしまう。調査結果を見ると、家族システムが不安定なきずなには、バラバラとベッタリがあるが、不安定な状態でもベッタリの方は楽観度が高かった。これは、ベッタリの家族は不安定ではあるが"受け入れる"という姿勢はありすぎるほどあるために、永続性という概念に関しては、楽観度が高くなっている。また、不安定なかじとりには融通なしとてんやわんやがあるが、この場合は、てんやわんやに比べ融通なしが楽観度は低い。これは融通なしの家族は親が絶対的リーダーシップを握っているため、子どもの意見が受け入れられることがなく、子どもが「家族」というものは自分自身をすべて受け入れてくれる場だと感じていないためである。

このことが子どもが物事を楽観的に捉えられない原因の1つになっているのではないかと考える。

#### ・ PS

外的・内的に関しては家族関係との相関は曖昧であり、私たちの行った調査だけでは分かりかねる。

この概念については、島久洋氏の説が関係している。それによると、課題遂行における成功は、失敗よりも内的要因に帰せられ、逆に失敗は、成功よりも外的要因に帰せられる傾向がある。この傾向は、バイアス仮説(self-serving biases hypothesis)と呼ばれ、自己の立場を養護するように働く。このように因果帰着の傾向に影響を与える要因として、内的・外的個人傾向だけでなく、バイアス仮説や達成動機などが挙げられる。そのため、家族と個人の関係だけでは判断がつかなかったのではないだろうか。

#### ・ PV

普遍性を表すPVは広がりを表す概念である。例えば、一つ悪いことが起こったとき、オプティミストであれば、人生のその部分では無力になるかもしれないが、他の部分はそのことに関連づけることなく普段通り生きていける。ペシミストの場合は、ある一つの部分でつまずくと、すべてを諦めてしまう。

この概念が家族関係との相関が低かった理由として、一人の人間にとって、"家族"というのは日常生活の一つの場であり、これだけで広がりや表す普遍性の概念を測るのは

不十分であると考えた。PVの概念は一つの状況だけでなく、さまざまな状況(学校、塾、習い事、友人関係など)から、総合的に判断することが必要である。

このように子どもの説明スタイルには家族関係も影響するということが実証された。しかし一方で、調査結果を見ると、家族という一要素だけでなく、子どもを取り巻く周囲の環境すべてが説明スタイル確立に関係することもわかった。そのため今後は他の様々な要素との相関についての考察を深めることが課題として残った。



## 参考文献

- 石澤志郎・長谷川精一・阿部重樹・増田周二 [「児童福祉の基本問題」](#) 福村出版  
1986年
- 福田俊一・増井昌美 [「家族の心理療法」](#) 朱雀書房 1998年
- ニッセイ研究所 [「日本の家族はどう変わったか」](#) NHK出版 1994年
- 湯沢 彦 [「新版家族関係学」](#) 光成館 1979年
- 村瀬嘉代子 [「子どもと家族への援助」](#) 金剛出版 1997年
- 三隅二不二・木下富雄 「現代社会心理学の発展1」 ナカニシヤ 1982年
- 藤原武彦・高橋超 [「チャートで知る社会心理学」](#) 福村出版 1994年
- 中島力 [「子どもの社会発達」](#) ソフィア 1993年
- 八木秀夫 [「現代日本の家族システムと青年期」](#) 神戸商大経済研究所 1990年
- 野々山久也訳 D・カンター W・レアー共著 [「家族の内側 家族システム理論入門」](#)  
垣内出版 1988年
- 日本家政学会 [「家族関係学」](#) 朝倉書店 1991年
- 岡堂哲雄 [「あたたかい家族」](#) 講談社現代新書 1986年
- 落合良行 [「中学一年生の心理」](#) 大日本図書 1998年
- 落合良行 [「中学二年生の心理」](#) 大日本図書 1998年
- 落合良行 [「こころの彷徨」](#) 日本文化科学社 1998年
- 武田丈・立木茂雄 「家族システム評価のための基礎概念：オルソン円環モデルを中心  
として」 『関西学院大学社会学部紀要』 60号 1989年 P73-97
- 曾田邦子・高瀬さおり・中安裕子 [「家族システムの視点から見た中学生の無気力と家  
族関係」](#)  
関西学院大学卒業論文 1991年
- M.セリグマン 山村宜子訳 「オプティミストはなぜ成功するか」 講談社 1994年

